

---

# あれから二人

ナイトバロン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

あれから二人

### 【Nコード】

N4165F

### 【作者名】

ナイトバロン

### 【あらすじ】

小五郎×英理モノ。結婚記念日を二人で過ごすことに。

妃英理は、思い出に浸っていた。懐かしい店に足を踏み入れたとき、変わらぬ内装や雰囲気、つい昔を思い出してしまっていた。「おい、英理。なにぼさつとしてんだ。バッグ貸せ、ウェイターに預けるから」

小五郎の無神経な声が、英理の華やかな思い出たちを、ジグソーパズルをひっくり返したようにバラバラと崩していく。

英理は、ふんつとそっぽを向き、小五郎にバッグを突き出す。引き戻されたくない現実。昔の小五郎は、こんな乱暴なものの言い方はしなかった。小五郎は、どうしてこんな男になってしまったのだろう。英理は、最近小五郎に会ったばかり考えていた。

今日は、小五郎と英理の結婚記念日だ。そして二人の居る場所は、結婚当初から別居するまで、結婚記念日に必ず訪れていたレストラン。二人は、この思い出のレストランで食事をするようになったのだ。

ことの発端は、蘭が商店街の福引で、このレストランの無料招待券を当てたこと。蘭は、この招待券を小五郎と英理にプレゼントした。これを期に、二人の復縁を狙っているのである。初めは嫌々だった二人も、しつこくせがむ蘭に根負けした。

小五郎は、ウェイターに英理のバッグを預けた。その後、二人は席に案内され、小五郎は赤ワインを注文した。食事の前に赤ワインを注文し、乾杯するのが二人だけの結婚記念日の決まりごとだった。「あら、覚えてたのね。意外だったわ」

英理は、こみ上げる嬉しさを、相手に悟られぬよう注意した。素直な感情をさらけ出すのが、なにやら照れくさくて仕方がないのだ。「ふん。何十年前前のことじゃねえだろ」

小五郎は、グラスを顔の前に掲げた。

二つのグラスが重なり合う。ガラスの繊細な音色と、テーブルに

立てられた小さな蜀台の灯火が、二人を優しく包み込む。

「それにしても、蘭も変なもの当ててきたわね。よりによってこの店の無料招待券なんて」

「まったくだ。……でもまあ、ここまで来ちゃったら後戻りはできねえ。酒と美味しい料理は楽しまなきゃ損だ」

子供のように笑う小五郎。

「それもそうね」

少し照れたような笑みを浮かべる英理。いつのまにか、思い出のジグソーパズルの一部が組みあがっていた。いつまで見ても飽きることはない、あの頃の彼の笑顔が。そしてそれは、今、目の前にいる小五郎と重なり合う。英理はわかっていた。心の奥底で、まだ小五郎のことを愛していると。

料理の美味さと懐かしさ、量の増えていく酒の力で会話が弾む。小五郎と英理は学生時代からの付き合いだ。話題は次から次へと沸いてくる。二人の顔には自然と笑顔がこぼれ、時に声を上げて笑い合った。いつになく上機嫌な二人。英理は、このままの時間が止まってしまうばいいのにと、小さくつぶやいた。

皿に乗った料理を片付け、デザートを食べている時、入り口に設置された鐘が鳴った。英理がそちらに目を向けると、若い男女が店内に入ってきた。

一人は、黒いサングラスを掛けた女性だ。髪は英理と同じブロンドで、背中の辺りまで伸ばしている。服装は、薄いピンクのワンピース。清楚な印象をうける。

男は、スーツ姿だ。しかし、ネクタイは外しており、シャツのボタンを二つほど開けている。黒髪を短く切りそろえている。

英理は小五郎の方に向き直り、

「ねえ、なんだかあの二人、若い頃の私たちに似てない？」

小五郎は、黙って彼らを見つめている。

英理は、なにも答えない小五郎から視線を外し、再び彼らを盗み見た。

英理は彼らに、昔の自分たちを思い浮かべていた。女性をエスコートする男性、テーブルを挟んで楽しそうに話をする姿、彼らのすべてが、自分と小五郎に重なる。そして、あの頃の、溢れんばかりの小五郎への愛情が、一気に押し寄せてくるのを、英理は感じていた。

あの頃に戻りたい、いや、これからの道を、再びこの人と歩んでいきたい。英理に迷いはなかった。

「ねえ……、あなた」

「ヨーコちゃん？」

そう言うやいなや、席を立ち、二人の元へ猛然と駆け寄る小五郎。なにが起きたのかさっぱり理解できていない英理。

「やっぱりヨーコちゃんだ！」

「あれ、毛利さん！」

サングラスを外すワンピースの女性。その素顔は、アイドル歌手の沖野ヨーコだった。突然の小五郎の登場に、かなり驚いているようだ。

「ヨーコちゃん、この男、誰？ ま、まさか、恋人とか……」

小五郎は、男をジロリと睨みつけた。小五郎の迫力に、男は今にも泣きそうな顔をしている。

「違いますよ毛利さん。この人、新しいマネージャーさんなんです。この前、マネージャーが商店街の福引でこの招待券を当てたから今日の夕飯はここで済ませようって話になったんです」

はじめまして、と恐る恐る挨拶するマネージャー。手のひらを返したように笑顔になる小五郎。そして、豪快に握手を交わすと、空いていた椅子にどかりと座り込んだ。

「ヨーコちゃんに会えるなんて、今日は最高についてるなー。小五郎ちゃん嬉しいー」

小五郎は、酒を注文し、二人のテーブルで一緒に飲み始めてしまった。沖野ヨーコに思わぬ場所で出会えたためか、ペースはどんどん早くなっていく。

英理は、額に血管を浮かび上がらせ、亭主の醜態をひたすら眺めていた。こちらに戻ってくる気配はなし。業を煮やした英理は、預けていたバッグを受け取り、さっさと店を出て行ってしまった。

早足で、自宅のマンションへと向かう英理。

「あんな男とよりを戻そうと、一瞬でも考えた私がバカだったわ！  
誰にともなく、夫への愚痴を吐き捨てる。

バッグの中にしまつてある携帯電話に着信が入る。発信者の名前は毛利小五郎。

「……………」

発信者の名前を見るや否や、電話の電源を切る英理。今後十年は、小五郎の声を聞きたくない、そんな様子だ。英理は、携帯電話を乱暴にバッグのなかへ放り込んだ。

「……………」

英理は、バッグの中に小さな箱を見つけた。英理には、その包み紙に見覚えがあった。それは、ジゴバのチョコレートの包み紙。

「……………バッグを預けたときね」

その場で包み紙を綺麗に剥がし、蓋を開ける。チョコを一つ摘み、口に放り込んだ。

「やっぱりチョコレートはジゴバに限るわね。残念、あの人のプレゼントじゃなきゃ、もっと美味しく感じられたのに」

英理の顔には、あの頃の笑顔が浮かんでいた。

おわり

（後書き）

アイディアを思いついて、一気に書いてしまいました。蘭のためにも、この二人には是非復縁してもらいたいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4165f/>

---

あれから二人

2010年10月8日15時33分発行